

北越の百合若伝説(下) — 地方における伝説の生成と変容 —

板垣俊一

On the Legend of Yurimaka-Daizin at North-Niigata (2)

Shunichi Itagaki

五 泰澄伝説と観音信仰

元来、観音信仰と百合若伝説とは密接な関係を持っていた。説経も幸若舞も百合若を観音の申し子と語る。だから殊に観世音菩薩を祀る寺院にとって百合若の名は縁が深かった。すでに中山太郎「百合若伝説に就て」(「旅と伝説」77号、一九三四、五)が、「熊谷家伝記」を引いて、信濃国伊那の地にあった観音信仰と百合若伝説との結び付きを指摘している。この記録は大永二年(一五二二)のもので、その頃越後の隣国信濃に観音信仰と百合若伝説との結合が具体的に確認されたことは貴重である。既述のように、以前聖籠の杜に祀られていたのは諏訪神社であり、観音堂の地位はもつと低かった。さらに土地の名も諏訪山と言ひ、この地を開いたのは信州からの移民だったという伝えもある。しかし勿論それ以上は何も言えない。ただ、この地の百合若伝説の広い背景として一応は視野に入れておくべきだろう。聖籠の観音信仰の伝播ルートとしては、北陸の海沿いの道がまず考えられる。

前節に引いた「本縁起」は百合若大臣の話から次のように泰澄の話へと続く。

其後、聖武天皇の御宇天平九年、泰澄とて清の国の御人にて天下に稀なる高僧なり。上人、白鳳年中当国へ渡り、白髮染衣の身にして、神通自在、身に不叶と云ふ事なし。常に清の国の白山に安居して、手には油を燈し□き説経不怠の名僧なり。今上皇帝御惱あれば即加持の役

僧なり。其利益瞬間に顕れ、鬼神も感ずる大徳なり。委くば元亨釈書に詳細たり。越後の国、米山に安□海す□□し時古志郡国上山に雷を縛し、伽藍を建立し、其より大夫に來り、百合若大臣の事を思へ、縁丸が菩提のために、常に信仰せし一寸八分の十一面観世音菩薩を御服仏にして仰すべしと云ひ、而後、人王五十一代天城天皇の御宇、大同元年、何国となく異人來りて堂舎を建て、此聖者を籠るが故に聖籠山と名附たり…(下略)…(注13)

誤字脱字があつて文意の通りにくいところがあるが、泰澄の事は文中に言う「元亨釈書」によるものらしい。しかし「元亨釈書」そのままの引用ではない。まず「清の国」が分からない。始めの「清」は中国を意味するらしく、とすれば泰澄を渡來人と考えていたことになる。また、国上山から当地に來て縁丸の菩提の為に自分の信仰していた一寸八分の十一面観音像を残して去つたという部分は、「元亨釈書」に無い本縁起独自の記事である。「御服仏」とは胎内仏のことであろう。大倉氏は、百合若の信仰していた小さな古い観音様が、当寺の十一面観音の躰中の何処かに埋め込まれているのだ、とも教えてくれた。その方が話が古いとはかぎらないが、古くは既述の如く縁丸菩提の為に百合若が創建したと伝え、縁起に十一面観音をまつる泰澄が出てくるのは安政六年の記録からで、つまり泰澄はその辺りから観音寺の縁起に現れてくるのなら、胎内仏も百合若のものとする方が古態ではある。

それでは観音寺の縁起と泰澄の結び付きは大野神という学者の恣意的な捏造であつたらうか。観音信仰と泰澄との密接な関係からすると、そうと

ばかりは思えない。以下のように当寺は泰澄伝説とも自然に結び付く条件を持っていた。

修験の山、加賀の白山を開いたと伝える越の大徳泰澄の伝説は、白山信仰とともに北陸に広く分布する。越後国の国上寺で雷童を捕らえた話はすでに『法華験記』、『今昔物語集』、『元亨釈書』などに載り、『越後名寄』四(宝曆六)にもあつてかなりよく知られた話であつた。国上寺は越後における白山信仰浸透のルート上にあり(注14)、本堂には阿弥陀仏を祀りながら、向かつて左手の一段低くなつた土地に越後三十三観音第二十二番札所として千手観音(十一面千手観音)をも祀っている。泰澄の伝説を持つからには観音信仰があつて当然である(注15)。たとえば井原西鶴の『本朝桜陰比事』(元禄二年刊)巻一「春の初の松葉山」に、こんな話がある。都の丹波境の山の「高根の景地に、大同年中の建立といひ伝へて、楠木作りに、一間四面の観音堂」があつた。堂中には観音ならぬ雷神が鉄の鎖につながれて封じ込められた。古記録によれば「応永元年(一三九四)霜月十八日の夜、大雪ふつて、雷なり出し、其数しらず落かよつて、諸木をくだき、里の屋を破り、人の命をとる事、男女に式十四人、万民のなげきなる時、北国がたより真言の旅僧きたつて、是をふうじ籠られし」と書かれていた、と。典拠は分からないが伝説としてもありそうな話である。雷を捕らえた「真言の旅僧」と言えば、国上寺の泰澄がまず考えられ、泰澄の雷童呪縛の話は近世の仮名草子『葛城物語』にもあり、よく知られていた。それにしても大同年中と言ひ、観音堂と言ひ、余りによく道具立てが揃つている。百合若伝説とは無関係だが、北陸の観音信仰と泰澄の關係は、『観音全集』(第六卷)「観音の札所と伝説」によれば、滋賀県大津市石山町正法寺(千手観音)、敦賀市金前寺(十一面観音)、石川県能美郡那谷村那谷寺(千手観音)など、泰澄開山とする観音札所の寺院が幾つも見られ(注16)、このうち大津の正法寺の伝説には、当寺の千手観音は泰澄大師が桂の木で刻んだものと伝え、かつ伽藍に落雷のため雷神を縛り上げたという、右の話に似た伝説まで付け加えている。

泰澄伝説と観音信仰との密接な結び付きは右の如くであり、越後の地でも如実に見られるところである。前掲高岡功論文によれば、米山—国上山—弥彦—沼垂が、越後における海沿いの白山信仰の浸透経路であつた。天正年間成立の『越後国三十三番観音順礼補陀』に諏訪山の聖籠山観音寺の

御詠歌は、「越後国国府の人番女という坊さんが、西頸城郡能生町の白山神社の託宣によつて詠じた」と添書されて「いる」というから(注17)、これによつて我々は越後の白山信仰の経路を、米山の前に能生を、沼垂の先に聖籠を付け加えることができよう。即ち、能生—米山—国上山—弥彦—沼垂—聖籠となつて、本節冒頭に引用した「本縁起」が記すところの白山から大夫(地名)までの泰澄の足どりに重なる。現実的には泰澄が歩いたのではなく、白山信仰の浸透の経路であつた。沼垂から聖籠への経路は明らかで、元沼垂白山権現は聖籠の地と水路による交通が可能だつた新潟の沼垂に在つた。その本地仏は十一面観音であり、かつて白山神社の別当職をしていた得生院(移転して現在新潟市山木戸)に受け継がれているという(前掲高岡功論文)。この得生院もまた観音寺と同じく真言宗智山派の寺院である。観音寺が智山派に属するようになるのも、泰澄の白山信仰をこの寺が草創の中心に据えたときであつた。

越後の白山信仰の、海岸ルートのうちで、泰澄伝説を最も詳しく語るのは米山縁起である。米山は古くから米山薬師として知られた修験の靈山だが、その縁起(越後国頸城郡米山略縁起)、山岳宗教史研究叢書17「修験道史料集」I「所収」では、「夫れ当山の御室の薬師如来と申奉るは、人王四十三代元明皇帝和銅五年、越前の州泰澄禅師当国斗葎の節、是嶺に靈窟有り、中に医王善逝在す、是薬師如来の浄土也と夢(ゆめみ)らく、始めて嶺に躋、靈窟に臻(いた)れば、光耀靉郁として尊容雲霧の隔る如し……」と、十一面観音は薬師如来に替わつてゐるが、しかし開山を泰澄とし、沖を通る船に鉢を飛ばせて供米を乞うた伝説をあげて「米山」の地名起源とするなど、薬師信仰の背後に白山系の観音信仰の姿をうかがわせている。現世利益を祈る薬師信仰の要素は、『元亨釈書』等に語る泰澄の伝説、即ち「十一面観音法」の呪法によつて伝染病を平癒させた靈験譚に通じ、観音信仰と相容れないものでは無く、聖籠の観音堂の敷地から発掘された壺の中の「薬種人參之様ナル物」は、観音信仰に米山薬師を經由してやってきた白山信仰の習合を推定させる(注18)。『越後三十三観音縁起集』の編者下正中は、昭和三年九月聖籠観音参拝の折のこととして、「名鷹「緑丸」が宿つたと伝はる杉の木は数百年前に枯死して二代目がだいぶ大きくなつてゐる。老杉の一部分が傍に残つて雨ざらしになつてゐる年々腐蝕し行き、又地方人が薬にでもするか削り取るあとも見えるが何らかの保存法が必要と思

はれる」と記している。案にでもするのが削り取る跡が見えるというのは、如上のような民間信仰が生き続けていたことを語るものだろう。

ところで米山の泰澄伝説は、能生を經由して、さらに能登の石動山にたどることが出来る。石動山もまた泰澄と十一面観音で知られる。石動山修験の活動は、加賀から越後米山方面への白山信仰の経路にあって、間接あるいは直接に影響が及んでいると思われる。だが、その石動山天平寺縁起に泰澄開山の事が明記されるのは、近世初期に成立した新縁起と呼ばれるものである。新縁起は承応三年(一六五四)林羅山が書いたもので、それ以前古縁起に泰澄のことは全く出てこない。元來本尊も鎌倉期には虚空蔵菩薩(拾芥抄)下、第九。草創は智徳上人)とあって、十一面観音は後で迎えられた仏であった。しかし古くから疫病平癒を祈る山としても信仰があり、このことを考えると、石動山の泰澄伝説の由来は、もともと虚空蔵菩薩を祀る山であったが、同時に疫病の平癒を祈る山としても注目されていたため、ここに医薬の仏としてより適切な十一面観音が合祀され、さらに十一面観音の縁で、その帰依者として知られていた泰澄が大きくかわることとなったようである(田中久夫「能登方道仙人と十一面観音信仰」一九八二。民間宗教史叢書7、速水侑編「観音信仰」所収)。後から新しく加わったものが最も古い開基者となるのは起源を語る話の常である。要するに石動山の泰澄伝説は、当時民間に信じられていた可能性はあるが、古縁起にある「太朝」の名によって近世の羅山が御墨付きを与えたものと見ていただいた間違いないようだ。

そして、このような新縁起は、近世に北陸各地に宣伝される条件が大いにあったのである。例えば、「江戸時代天平寺の衆徒が北陸七カ国を廻国勸進した時、祈禱札と共に石動山特産の薬を持参して頒布して歩いたことは、有名である」(山岳宗教史研究叢書10「白山・立山と北陸修験道」一九七七、三三三頁)。こういった事実から米山と別に石動山修験の直接的な影響を聖籠の地に考えられないこともない。近世、能登国三十三観音順札の札所が整備されてゆく背景にも石動山修験の大きな影響があったという(鹿島町史「一九八五、通史・民俗編」)。この点、越後の三十三観音札所の成立も事情を同じくする(注19)。また文化十三年(一八一六)、石動山講堂に於いて泰澄大師千五百年の法要が営まれた事も、北陸各地に泰澄の存在を新たに印象づけることとなっただろう。観音寺の由来を書いた安政六年の文章は、

大野神という儒学者の書いたものであり、それゆえ、近世の大儒林羅山が加賀藩主の依頼によって作成した権威ある石動山新縁起との関係を少なく見積もることはできない。

ただし観音寺と泰澄伝説との結合は一人の地方名士による作文としてのみは片付かない。石動山の信仰に注目すべき点は修験道よりもっと素朴な、在地の人々のこの山に寄せる心情である。あらゆる聖域は、古代から純粋な一つの信仰に貫かれていたことは無く、歴史的に層を成す複合的な聖地と見なされなければならない。石動山信仰の複合の最も基層にあるのは、農耕神、漁撈・航海神としての地域の信仰だった(同「鹿島町史」)。とりわけ高山の無い丘陵地帯の能登半島にあっては、「丘陵上に屹立する山頂は、富山湾西岸や七尾湾沿岸一帯の「浦の民」から、絶好の航路標識として仰がれた」(同「鹿島町史」一〇七頁)という事は注目に値する。このことは米山にも言えることで、米山の泰澄飛鉢伝説の受容基盤を、海岸に屹立して近海を航行する人々の恰好の目印となった地理的性格と、白山信仰のもつ航海神・漁撈神の性格から、航海の安全を祈る人々の尊信崇敬に置く見方がある(注20)。泰澄伝説と航海者とのつながりは、すでに白山信仰に有ったもので、越前には泰澄を船頭の子とする伝説があり、「白山大鏡第二神代巻初一」では彼の父を越前国足羽南郡阿佐宇津の渡守とする。さらに泰澄伝説に現れる能登の行者の飛鉢伝説、即ち租税の米を積んで日本海を航行する官船の船頭が供米を惜しんだため、船中の米俵が雁の如く連なって泰澄の居る越知峯に飛来したこと、これを悔いて船頭はのち泰澄に帰依し弟子となったという伝説もあった。石動山、米山、そして聖籠の森にも、航海の安全を祈る者たちの寄せる共通の心情があった。海洋の物語である百合若伝説とともに、十一面観音信仰と泰澄伝説とが聖籠の観音堂に結び付くのも、このような点にあったと考えられる。

なお、観音信仰のうち疫病平癒の靈験を説く現世利益の要素が、ことさら何ゆえに百合若伝説と結び付くのかという問題は依然残されたままであるが、これは恐らく嵯岐の百合若説経の在り方と結び付いている問題であろう。前田淑によれば、「嵯岐の百合若説経も病魔退散のために巫女によって語られる弓祈禱の詞章であり、百合若の物語がかって悪霊退散のために語られた宗教的な意味をもっていた、という折口信夫博士の説を裏付けるものである」(注21)という。百合若大臣の物語が病魔退散の祈禱のために、

民間の巫女によって唱えられた例は、この岩岐のイチジョーの他にそれほど確認されているわけではない。しかし、百合若伝説が疾病の平癒を祈る民間信仰と結合していることは、この物語のこうした在り方が古くは広く一般的だったことを推測せしめるに充分である。百合若伝説が日本の各地に残されているのも、この物語がかつて果していた、このような宗教的役割を考えて、はじめて理由の付くことである。時移り、時代が下ってイチジョーのような巫女とこの物語との関係が忘れ去られた地方に於いても、それらが果していた役割だけは、観音信仰に取って代られても確実に生き続けていたのである。これが百合若伝説の古層であった。

また、本節に述べた百合若伝説と白山修験との密接な関係は、緑丸の伝説が山伏など勸進聖たちの唱導に用いられたのではないかという、出雲の日御崎検校の伝説を手がかりとして前田淑が推定した問題(注22)に、はからずも符合することとなった。

六 緑丸について

百合若大臣について、今日確認できる聖籠の杜の最も古い伝説は、この杜の観音堂が緑丸という鷹の菩提のために百合若大臣によって建立されたというものである。つまり伝説の関心は、百合若本人よりも緑丸にあったのである。このことは、すでに引用した観音寺の旧記、慶長十三年(一六〇八)の「聖籠山観音堂二王堂建立之由緒(写本)に、「昔、百合若大臣御時、与緑丸申為御鷹菩提、十一面観音本尊同二王堂、御建立之由、今世迄申伝也。至今、鷹山数多御座候而、御鷹出申也、証拠也」とあって明白である。しかも「今世迄申伝也」とあることから、これは、記録に残される以前から土地の人々に言い伝えられて来たことだった。さらに、寛文七年(一六六七)の棟札(「聖籠山観音堂並二王門由来)になると鷹に関する説明が加わり、百合若は終身忠を尽くして死んだ緑丸の志に報いるため、その産地を聖籠山に尋ね、ここに観音堂を建立した(昔時、百合若大臣御寵愛之鷹、則号緑丸。其意、人倫忠、終身於被官功。為報斯志恩、尋彼鷹出所当國於聖籠山、兼建於一字堂、本尊十一面観音、立二王門、安置密迹金剛神)となつてゐる。そしてここにもまた、「事偏緑丸為菩提建立有之由、從來申伝也」とあって、観音堂の草創はひとえに名鷹緑丸菩提のためであると言う

のが、土地の人々による古くからの伝えであった。

また、このことは、「至今、鷹山数多御座候而、御鷹出申也、証拠也」と、伝説の信頼性をひたすら鷹に帰している事からも言えるだろう。実際その辺は鷹狩りに使われる優れた鷹の棲息するところだった。近年、この地よりさほど遠くない島見地区にゴルフ場開発の計画が持ち上がったとき、環境破壊につながるかと反対した人々の大きな関心の一つが、その辺り一帯が大鷹の棲息地であるという事実であった。付近には大鷹の営巣も確認されている。寛文の棟札に「至于今名鷹出来靈山也」とある如く、この地は古くから鷹狩りに用いた名鷹の出たところである。聖籠山の百合若伝説は、こうした地域性によって育まれたものだった。

或る地方史家の書いた書物に次のような文章(詳しくは後述)がある。未だに幕末の頃まで緑丸の子孫が栄へて居り島見郷老松の木の枝に緑丸の子孫が宿ると爪の跡が瘤になったのだと郷土の伝説の一つになつて居ります。近年まで村浦方面の老松の木の枝に瘤のある木が見られたのでありますが百年前後より二三十年前までの間に此の由緒ある山林も次々と畑に開墾され瘤のある木の無くなったのは誠に遺憾の極みであります。(注23)

これは聖籠の西南八キロメートルほど離れた内島見村(現在豊栄市内)の百合若伝説である。聖籠の伝説と同じ伝承圏内と考えてよいこの地方の人々は、大空を翔る大鷹の雄姿に百合若の緑丸を思ったのである。

各地の伝説には、鷹の忠義とその死を弔う話を中心とする例が幾つも見られ、聖籠の伝説と比較的類似したものとしては、旧能登国珠洲郡真脇村、鷹王山上日寺の例がある。「能登名跡志」(安永六年(一七七七)序)真脇村の項に、

真脇村 鷹王山上日寺と云密寺あり。此寺昔百合若丸と云人の寵愛ありし鷹海中にて死しに、此磯に寄り其菩提の為に建し寺也と云り、本尊千手観音は春日の作にて霊像也。七ヶ年目あてに開帳あり。其時は鷹来りて棟を不去と云り。昔其鷹の轍寄し処を経塚と云て、碓島の辺りあり、此寺の仁王尊は行基の作にて、峠の古寺にありしと云也：とあって、上日寺という真言宗の寺が緑丸菩提の為に建立されたものであること、本尊が観音(千手観音)であること、そしてまた真脇村は「國中第一の大猟場なり」とも言われ、鷹狩りの風習とも関係しているらしいこと

など聖籠の伝説と共通する要素が多い。しかしながら、重要な点で異なつてもいる。聖籠の観音寺の古い記録には、この話のように鷹がなぜ死んだのかは語られていないのだ。「其意、人倫忠、終身於被官功。為報斯志恩：」（寛文七年棟札）と記すところからすれば、能登の寺院の縁起のように百合若の故郷と離島（能登の例ではその地を「玄海島」と考えていたかも知れない）との往復に疲れて死んだという伝説は、聖籠の観音堂には無かつたのである（注24）。力尽きた緑丸の死骸が海辺に流れ寄つたものならば、その遺跡は流れ寄つた地に築かれるのが自然であり、わざわざ緑丸の故地を尋ねるまでも無い。日本海を北上した山形県と秋田県の境に在る孤島飛鳥の伝説でも緑丸の墓は嵐の海に死んで流れ寄つた処であり、また宮城県県の伝説にも、「陸前国名取郡千貫村鷹硯寺（鷹硯寺）」の草創を次のように伝えている。

千貫松嶺の北。武隅の西にあり。竜谷山鷹硯寺と号す。相伝。往時百合若が愛鷹緑丸の為に建る所也。大悲像あり。長谷観音と云。南北の村名も此に因て出づ。郷説曰。由利若の大人海曲欠想て。文房具の小硯を鷹翼に締て香空に放つ。終に重きに耐ずして死す。後人山畔に葬て寺を建是なり……（仙台叢書第八巻「封内名蹟志」巻六）

同書「緑丸ノ石」に、「千貫嶺深山の洞西に一石あり。東西に立。緑丸は由利若の飼し鷹也。其主を慕て謫居に至り、書を主に伝ふ。死後石に化す。依て云。此地は古の元海か島なりと云」（同「封内名蹟志」巻六）ともあり、九州の玄海島とは無縁と思える地方でも緑丸の死とその遺跡は玄海島でなければならなかつた。

磯辺に寄る鷹の死骸と供養の塚の伝説は、このほか沖繩の離島に多い（日本伝説大系15など）。「宮古島旧記」（一七二七。雍正五年）に載る「鷹の墓所の事」という水納島の伝説には、

一、鷹の墓所の事

昔大和人只一人水納島へ漂流して住居していた所、其後彼の大和人が飼いでいた鷹が米粉の袋を翼につけて飛んで来たので、彼の大和人不思議に思い感涙を流していたが、暫くして彼の大和人指先をかんで其の血を以て硯、筆の二字を袋に書き差し帰した所、幾程もなく鷹は其翼に硯と筆をつけて同島の石泊という浜へ舞いつき、其のまゝ鷹は死んでしまいました、鷹生きていたなら何かと方法もあつたらうに

と大和人は悲嘆にくれていたが、やがて鷹の死骸を葬り墓所を仕てた所と言ひ伝えてをります、其後毎年に鷹が舞い下り、その元祖の跡を弔うかのように彼の鷹の墓の辺りに飛び廻り人々の哀れを催しますが、大和人の行衛については前代のこととして伝えてをりません。

（稲村賢敷編「宮古島旧記並史歌集解」）

とある。稲村賢敷の注によれば、この鷹の墓に関する大和人の話は「ゆいあかでいーず」（百合若大臣）の伝説として、水納島および多良間島に伝っているという。硯と筆を要求したのが百合若となつていて、妻の愚かさを語らないのは、女の靈力を信じたかにも沖繩らしい点であるが、これもまた関心の中心は百合若よりは緑丸とその子孫にあつた。この鷹の墓は、「鳥塚」と呼ばれ、近代に至るまで島の人々によって供養されてきたところである（注25）。旧記の関心はあくまで鷹の墓とそれへの悲傷に集中しており、百合若の名すら不要なものとなつてゐる。

こうして見ると、能登の鷹王山上日寺の例は、いずれも鷹を中心とする点では共通するが、聖籠の伝説よりも宮古水納島の伝説に近い。離島との往還に疲れて死んだ緑丸の死骸を葬つた地の伝説と、忠を尽くして死んだ鷹の産地を尋ねてそこに供養の堂舎あるいは塚を築いたという類の伝説とは区別したほうがよい。後者は聖籠の伝説だけの特徴ではなく、たとえは次のような例もあつて、離島との往還に関心を示さない一つの類型と見ることができらう。

まず広島県江田島（旧安芸国安南郡江田島本浦）の伝説である。

鷹宮 在安南郡江田島本浦、社中安鷹因祭之、今斯地放鷹、則必失其所往、恐鷹靈之所使然乎、俗伝、古有百合弱大臣者、武門而甚好放鷹之術、其所愛之鷹名緑丸、其鷹死後祭其靈、今鷹宮是也

（芸備国郡志）上（二六三）所収）

伝承地は島でありながら、これは「放鷹之術」、「其鷹死後祭其靈」とあつて、鷹狩りに用いた愛鷹の死にのみ関心を示すに過ぎない。

また、次のような京都府の伝説、旧山城国葛野郡真珠庵村の「若緑松」の伝説に見られる緑丸への関心はきわめて聖籠の伝説と類似する。

○若緑松 在同所真珠庵村東南。大古松是也。其本に有小祠所祭木給神也。古老説に、此地は古百合弱大臣の宅地也。平日愛せる緑丸と云ふ鷹あり。恒に此梢に遊しとかや。此鷹の名誉世の諺に云ふ処也。

彼樹は枯るといへども、後人植統て為其号也。(『山州名跡志』卷六)
 一方「越後野志」(一八一五—五四)に載る聖籠の伝説は、緑丸の宿る樹に
 関して次のように伝えている。

翠丸旧趾

豊田莊聖籠村ノ松林中ニ、古昔百合弱麻呂愛育ノ翠丸ト云鷹栖棲ルト
 云、老杉一大樹アリ、四辺垣ヲ為テ護之、然ルニ、寛政中枯テ今ハナ
 シ、可惜其側沙丘ニ本州三十三処観音大士二十九番ノ殿アリ、沙丘松
 林ノ下諏方山村ニ別当鷹尾山観音寺ト云密寺アリ、寺領田五十石ヲ有
 ス、

〔越後野志〕所収

前者に「大古松」と言い、後者に「老杉一大樹」と言う。松と杉との違
 いはあるが緑丸の棲む針葉常緑樹を伝説の中心とする点は全く同一であ
 る。内島見の伝説のように、聖籠の伝説には「杉」と「松」との混同もあつ
 た。「翠」との連想からは「松」が自然だが、実際に観音寺の境内に在つた
 のは杉である。寛政年中に枯れたという緑丸ゆかりの杉は、「若緑松」と同
 様にその後数代の植え替えを経て近代に至っている(注26)。

このような一群の伝説に出てくる鷹は、沖繩の宮古或いは能登の伝説の
 如く、秋になるとはるばると南の島へ渡り、春が来るとまた北へ帰って行
 くサシバといった渡り鳥の鷹では無いだろう。一定の地域に留どまつて棲
 息する大鷹のような留鳥であると考えられる。柳田国男は百合若の鷹の伝
 説について次のように言った。

緑丸の翼を休めたと云ふ松は諸国に在る。出羽にも奥州にも此鳥の為
 に築いた塚がある。百合若が後に廻国して供養をしたなどと謂ふは作
 り事で、多分は遠き昔勇ましい鷹の姿を見て何れの旅人の家でも之を
 生霊の音信を伝へるものと、考へてゐた名残であらう。絶海の孤島に
 独り住む者、或はさうでもして生きて居るかと思ふ者の身内が、稍々
 肌寒い秋なかばに、遙々と渡つて来る鷹の声を聴いて、忘れ難い有り
 し日の面影を深めるのは自然である。

〔柳田国男集第一巻「海南小記」二二〇頁〕

すなわち、渡り鳥の鷹の旅の途上にある者の靈魂の使者の姿を見たのだ
 という。確かに緑丸が翼を休めたと伝える松や杉は諸国にあるが、しかし
 緑丸は必ずしもはるばると海を渡る鷹だけでは無かった。百合若伝説の大
 事な要素が海を渡る鷹にあつたとすれば、鷹狩りの愛鷹として大切に飼育

され、また空を飛ぶその雄姿に靈鳥の姿を感じさせた大鷹の如き、留鳥と
 しての鷹に寄せる思いは、百合若伝説をまた別の形に変容させたのである。
 聖籠の老杉に宿る緑丸の姿には、聖なる老樹とそれに宿る靈鳥の觀念が
 あつたかも知れない。観音信仰との結合も或いはそこに見出だせるように
 思う。観音信仰のうち千手信仰は古来の靈樹崇拜と接合しているといわれ、
 泰澄の奉じた十一面観音も十一面千手観音であろうという(注27)。ただし
 観音信仰の靈樹伝説は第一に観音像を刻む為の靈木にあつて、その点では
 聖籠の「緑丸の杉」や京都の「若緑松」の例はこれと異なる。しかし、百
 合若伝説が観音信仰と強く結び付いていることはすでに見てきた通りであ
 り、その観音信仰に靈樹崇拜のあることは、形は違つても百合若伝説の中
 に何らかの形で、そのような信仰が持ち込まれる可能性を考え得るのでは
 なからうか。緑丸の樹にそうした觀念を見て置きたい。

七 郷土伝説の再生

以上述べてきたように、聖籠の観音堂をめぐる百合若伝説は、さまざま
 な要素の複合によつて成り立っている。しかしその中で古くから、かつ広
 く一般に知られていたのは、緑丸という鷹を中心とした伝説であつて、こ
 の鷹の主人として自明のように語られてきた百合若大臣の物語は、きわめ
 て漠然と思ひ描かれていただけだった。百合若大臣に関する整つた口頭伝
 承も無く、何かの折に、幸若舞や説経で語られる「百合若大臣」が、他の
 文献を経由して、土地の識者に引用されるに過ぎなかつた。今日に残され
 ている文献がすべてを語っているとは言えないが、そこから推測されるこ
 とは、この土地にまどまつた百合若大臣の物語を提供してきたのは、或る
 程度知識ある人々であつた。現在残る最もまどまつた聖籠の百合若伝説は
 第四節に取り上げた観音寺の「本縁起」であるが、これは既述のように安
 政六年の大野神という儒学者の文章に端を発する地方知識人の作成であつ
 て、口碑として伝わつたものではない。内容の整つた地方の伝説にはこう
 した例がまま見られるところである。

例えば聖籠の百合若伝説と同じ伝承圏内にあると思われる豊栄市内島見
 の伝説でも、地方史家の手に掛かると次のように新たな伝説の創造がなさ
 れるのである。

① 越後の国に伝はる古記録を繕て見まするならば天智天皇天智二年百濟の国に敵する蛮國あり百濟帝より我朝廷に救へ乞ふ天皇筑紫の木丸殿へ御幸あり其の頃豊後の国に太宰の和田丸と云ふ武勇並ぶものなき長者あり天皇此の和田丸に百濟の國を救援すべく勅命せり抛て和田丸百濟の國に渡り蛮國民と戦ふ事百合若大臣と云ふ事百合勝百濟帝歡喜之を稱して曰く異國人百合若と云へしを自然和田丸事百合若大臣と転訛す嗚ふる様になつたと云ふ事であります。其の後陸奥越後に蛮居する蝦夷征伐の勅命を受けまして大臣各地の蝦夷を平定しつゝ越後の國にも這入つたのであります。先づ茲に伝説として見逃がす事の出来ない事が有ります。曰く太古に於ける嶋見村の地に鎮座せらるゝ正観世音菩薩の御尊像は百合若大臣の守本尊であつた。此の伝説は太古より伝へ来たり村内の識者皆之れを真なりと確信するものであります。

② 百合若大臣は暫し此の地方に滞在し水利を起し土地を開発し農漁業狩猟等を改善し能く郷民を愛護したのであります。郷民は皆百合若大臣を恰も慈父の如く尊敬したのであります。又百合若大臣には東征の途路、江州日室山より一羽の名鷹を得たのであります。緑丸と名付けたのであります。大臣数年吾が郷土に居りましたので緑丸にも子孫が榮へたのであります。徳川幕府の口碑に曰く將軍家の鷹匠が新発田領内に這入ると將軍家の鷹は吾が郷土に生れし鷹に逢ふと將軍家の鷹は身を竦めて立ち得ざりしなりと、以来新発田藩に鷹匠を禁止せられたのであります。以上の如く如何に百合若大臣の緑丸が勇猛で有りましたか想像に余りがあります。未だに幕末の頃まで緑丸の子孫が榮へて居り島見郷老松の木の枝に緑丸の子孫が宿ると爪の跡が瘤になつたのだと郷土の伝説の一つになつて居ります。近年まで村浦方面の老松の木の枝に瘤のある木が見られたのであります。百年前後より二三十年前までの間に此の由緒ある山林も次々と畑に開墾され瘤のある木の無くなつたのは誠に遺憾の極みであります。

③ 百合若大臣は小国街道より越後に這入り各地に散住する蝦夷族の巢穴を蹴撃或は迫撃して吾が島見郷まで追い詰めたのであります。……茲に吾が郷土の周辺に於て最後の闘争を続けましたけれど百合若大臣の武勇には抗し難く遂に吾が島見郷土に於て蝦夷族全部が殲滅せられたのであります。百合若大臣におかせられては此の討伐戦に於て家

来数名を失つたのであります。夫れが恰も我子を失つた思いをなしたのであります。風光明媚松林鬱蒼たる清浄なる砂丘の地を下して茲に其の屍を埋めて塚となし其の上に祠を建立し自身の兜の守り本尊月夜見の命の御身体を奉安したのであります。此の神社こそ市川神社なのであります。川崎祥光『内嶋見村史談』(注23)

右の引用はだいたいの内容がつかめるように主要な部分のみに限った。段落の番号は説明の都合上筆者が付けたものである。

ここでの百合若は先住民を追い払って郷土を開いた文化英雄となつてゐる。つまりは、伝説を郷土の歴史に強引に結び付けることで、百合若大臣の蝦夷征伐という新たな伝説が捏造されたのである。しかしこれは、一見して分かる通り、北越の百合若伝説に関する貴重な文献でもある。①に言う「古記録」とは、聖籠観音寺の縁起にはかならないが、「太古に於ける嶋見村の地に鎮座せらるゝ正観世音菩薩の御尊像は百合若大臣の兜の守本尊であつた」とは、まぎれも無いその土地の伝説であつた。②でも、この土地の鷹が鷹狩りの鷹としていかに優れていたかを語る逸話と、さらに「島見郷老松の木の枝に緑丸の子孫が宿ると爪の跡が瘤になつた」という伝説を記しているのは貴重である。また、③にいう市川神社は「延喜式」の神名帳に載る沼垂郡の式内社であり、伴信友「神名帳考證」等は中条町の乙(きのと)とするが、「内嶋見村史談」の著者はこれを内島見の観音堂のすぐ近く、著者川崎祥光の住居の西隣に位置する現在の神明宮に比定する。この辺りも聖籠の杜と同じく小高い丘になつていて、かつては河川や沼沢地帯だつた付近一帯の地理的な指標となつていたと思われる。この市川神社が百合若大臣の創建だとするのは著者の私見であつて郷土の伝説ではないが、老松と緑丸の子孫の伝説、百合若大臣と観音堂の観音像の伝説など、これまで述べてきた聖籠の百合若伝説と内容が基本的には同じである。(ただし緑丸については多少の相違がある。)

日本海に沿つて北上する文化伝播の経路を想定すれば、或いは内島見の伝説の形成が先であつたとも考えられるが、しかし右に引用した「内島見村史談」の百合若大臣に関する記述について言えば、これは明らかに「聖籠山観世音略縁起」の内容に基づいた想像である。このように、この地に百合若大臣の詳しい物語が独自に形成伝承されたわけではなかつたから、少しでも書物に明るい人たちは、他の文献から得た知識によつて北越の百

合若大臣を語ろうとしてきたのである。

確かに、この伝承圏内においては、昔話の百合若大臣も採録されてはいる。昭和四十八年七月十五日、野村純一・佐久間惇一両氏の採訪による、北蒲原郡豊浦町切梅に住む波多野ヨスミの語った「百合若の話」である。詳しくは野村純一「北湖の百合若大臣(上)」(『昔話伝説研究』第五号所収)、および「波多野ヨスミ女昔話集」について見られたいが、これは採録者も言う通り、一人で六百話も語る話者の、その中の一話に過ぎず、この土地の伝説と密接な関係を持った話では無い。しかしながら、伝承者の住む土地は聖籠観音の信仰圏ではあった。ただ一人の話者が語った希な昔話だとしても、聖籠の観音堂に伝わる百合若伝説が有ってこそその話であろう。この話者は祖母から伝え聞いた話だという。佐久間惇一の解説によれば、話者の生家は葎書の多い家だったそうだし、彼女の母の家も「字者まき」だったというから、この昔話も男の読書を通して家の女に伝えられ、女によって家庭内伝承となった可能性が充分考えられる。故に、これもまた地域性豊かな伝説とはゆかないが、この地方が少なくとも百合若大臣と緑丸の名を長く記憶し続けてきたことだけは確かである。

注(13) ちなみに堂舎建立を「大同元年」とすることにふれて置く。当寺の縁起にはしばしばこの年号が出てくる。これは実態的な年号であるよりは、象徴的な年号である。たとえば、清水寺の場合でもその建立を「大同二年」とする説もあったし(「恨の介」上)、次に引く井原西鶴の「本朝桜陰比事」(巻一の二)にも大同年中の建立と伝える観音堂とあるなど、観音信仰とこの年号の結び付きは強い。さらにまた、西頸城郡の糸魚川付近では昔の山崩れについて「大同二年のぬけま」、「大同二(元)年の大ぬけま」(新潟県西頸城郡郷土誌稿第二輯・口碑伝説篇)昭12。なお同書一〇三頁「石坂寺観世音」の話にも大同の頃とある(という)ことから、民間の歴史における何らかの画期を意味する年号であった。(世直しと関連する私年号的なところもあるか。これは「遠野物語」に載る「村々の旧家を大同と云ふは、大同元年に甲斐国より移り来たる家なればかく云ふとことなり。大同は田村將軍征討の時代なり。……」(第二四話)という、村の草分けについての話にも通じ、何かの起源を語るときの民間の年号になっている。その名義は、中国の「礼

記」礼運策に由来する大同思想と関連するだろう。

(14) 高岡功「越後における白山信仰の浸透」(山岳宗教史研究叢書9、鈴木昭英編「富士・御嶽と中部霊山」所収)。

(15) 浅井了意の仮名草子「葛城物語」には、「古志の郡のうち国上といふところには山寺あり観音を本ぞんとす」とある。近世の国上寺は観音を祀る寺として遠くに知られていた。

(16) 参考までに泰澄伝説を伝える越後の観音堂を二例あげれば、「名立町岩屋堂観世音像は、人皇四十二代文武天皇大宝二年に、泰澄大師が此の地に來り、刻したものである」(新潟県西頸城郡郷土誌稿第一輯・口碑伝説篇「七七頁」)、また、「西海村字御前山(ゴゼンヤマ)の観音堂の境内に、高さ八十米もの磐立松がある。これは昔泰澄大師が來られ割箸を立てたのが、大地に根づいたのだといふ(話者 田原光円、採録者 竹下治)」(新潟県西頸城郡郷土誌稿第二輯・口碑伝説篇「二頁」)。

(17) 斎藤秀平「新潟県郷土アルバム」(一九五七)に次のようにある。
それからちよっとおもしろいのですが、今から三百八十年位前の天正年間にできた「越後国三十三番観音順礼補陀」というものに、次のようにしるされています。
廿九番 蒲原郡聖籠山真言宗観音寺
雲霞 かかる越路の果てまでも
尋ぬる法のみちは有りけり

なおこの御詠歌は、越後国国府の人番玄という坊さんが、西頸城郡能生町の白山神社の託宣によつて詠じたと添書されています。(五五頁)

これからすれば、泰澄伝説は更に後世の付加としても、越後の観音信仰の始まりは白山修験によつて天正年間に成立した、ということになるが「越後国三十三番観音順礼補陀」は未見である。

(18) 「越後国頸城郡米山略縁起」は泰澄伝説を大きく取り込んであり、「これとは同文の縁起が、長岡市十日町その他の米山講中にも伝えられ、講中行事の際に誦唱されている」(山岳宗教史研究叢書17「修験道史料集」I「大関政子解説」との事で、泰澄という人物は越後の人々によく知られていた。また、新発田にも「米山薬師花立」の塔があるというから、米山薬師の信仰圏は下越にも及んでいた。なお「越後宝鑑」上巻(一九〇一)所載の「真言宗新

義派米山寺密蔵院」の縁起は、泰澄の開基と源義家が奥州攻めの帰途守り本尊を祀った事などを記して、内島見の観音堂の由来や前述の大倉氏が語った百合若の蝦夷征伐の話に共通するところがある。

(19) 高岡功「越後三十三番観音札所―白山修験と観音信仰―」(同上)。

(20) 大関政子「米山薬師と米山講」(山岳宗教学研究叢書9、鈴木昭英編「富士・御嶽と中部霊山」所収)。

(21) 前田淑「日本各地の百合若伝説(上)」(福岡女学院短期大学紀要「五号、一九六九」)。

(22) 前田淑「百合若説話の成立に関する一試論」(福岡女学院短期大学紀要「七号、一九七〇」)。

(23) 川崎祥光「内嶋見村史談」(一九五四年発行)、第三章「百合若大臣の蝦夷征伐」。

(24) 安政六年の「上梁文」にはこれがある。しかし、家の者の書翰を百合若のもとへ運び、力尽きて死んだとはあるが、海上に落ちたとも、流れ寄ったとも記さない点に不審がある。

(25) 永積安明「沖繩の百合若伝説」(「文学」一九七〇、二)。なお、永積安明は宮古の百合若伝説について次のように述べている。

もともと百合若伝説は、漂流して来た大和人から伝えられたものかと思われるが、この伝説が、水納の島びとに伝承される過程で次第に、大和人の興味をひいた百合若の英雄的な征服譚、妻争いの事件の展開、さらに復讐譚としての結末に集中することをやめて、秋になると毎年、はるばる海を越えて渡って来る、なじみ深い鷹の群れ、また時に力尽きて落鷹となって島に漂流する、あわれな鳥たちへの同感に、その主題を切りかえられて行ったものと思われる。(八八頁)

(26) 新発田図書館蔵「北蒲原の銘木」(インク書き、成立年不明)に、次のようにある。

聖籠村

- 一 通称名 緑丸ノ杉
- 二 樹種名 杉
- 三 所在地 聖籠村大字諏訪山宇杉ノ下観音堂境内
- 四 地上目通廻 八尺
- 五 梢頭迄ノ高(大約) 九間

六 大凡ノ樹齡 百三十年

七 銘木ニ関スル伝説 大同年間百合若ナル者ノ愛鷹緑丸ノ

羽根ヲ休メタル古杉ノ古蹟ニシテ数代

植替ヲ經テ現今ニ至レリ

(27) 小林太市郎「千手信仰の民間的潮流」、『仏教芸術』(一九六一)三六号。

〔付記〕本稿は県立新潟女子短期大学研究紀要第三十集掲載拙稿「北越の百合若伝説(上)―地方における伝説の生成と変容―」の続編である。